吉備池廃寺

第５次調査　現地説明会資料

2001.3.20

奈良国立文化財研究所・桜井市教育委員会

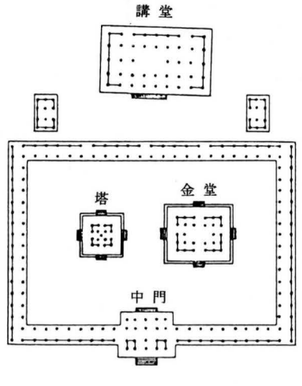
１．はじめに

吉備池廃寺は、1997 年からはじめた発掘調査によって発見された飛鳥時代の寺院跡です。この寺院跡が日本で最初に天皇が発願（舒明 11 年＝ 639 年）した「百済大寺」の有力な候補であることをご存じの方も多いと思います。

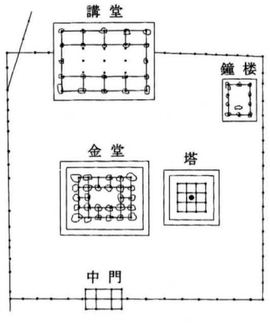
池の南東にある土壇を発掘した第１次調査では、掘込地業（ほりこみちぎょう）をほどこした巨大な基壇を発見し、寺院の中心堂宇である金堂（こんどう）の跡と推定されました。また、この西方にある土壇の調査（第２次）では、中央部に心礎を抜き取ったとみられる大きな穴や、心礎の据付痕跡などを確認し、この土壇が塔跡であることを明らかにしました。このような、金堂を東に、塔を西にならべる堂塔配置は法隆寺西院にみられ、「法隆寺式伽藍配置」と呼んでいます。この場合、金堂と塔を取り囲むように回廊がめぐり、金堂と塔の中央部南に中門が建ちます。この中門と回廊の発見をめざした第３次調査では、想定位置に中門がなく回廊がのびていることが明らかになりました。また、この調査では、塔の西側にも回廊がまわることを確認しています。さらに講堂および東面回廊などの発見を目標とした第４次調査では、ほぼ想定位置に東面回廊の雨落溝を検出して、回廊の東西幅はほぼ確定できたものの、金堂と塔の中央部北方に講堂は発見することができませんでした。

これらとは別に、金堂跡の北方で桜井市教育委員会が実施した調査（1998 年度）では、巨大な柱掘形をもつ掘立柱建物の一部を発見しており、僧侶が日常生活をおくる僧房（そうぼう）の可能性が高いと考えています。

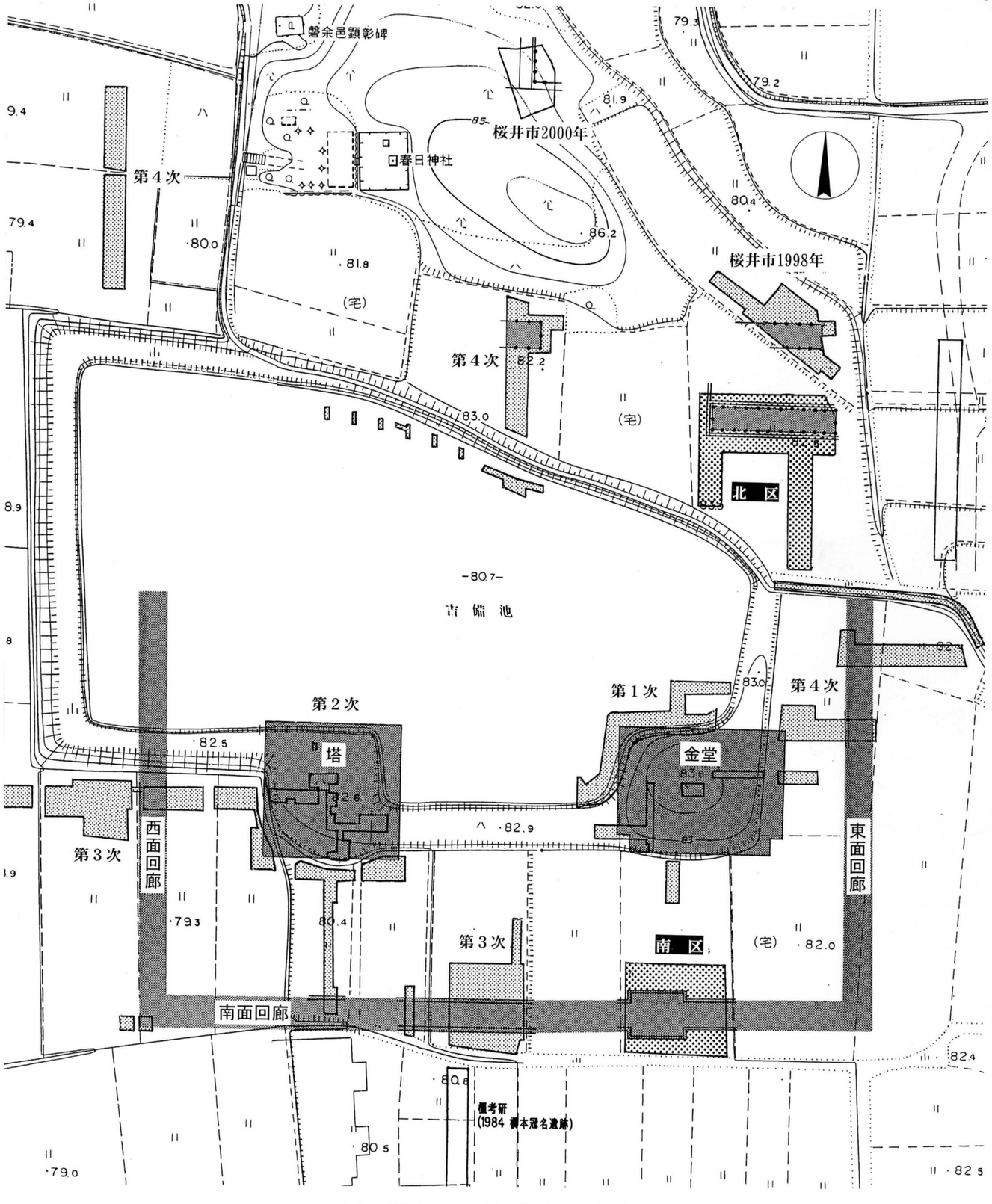
このような調査成果から、当初、法隆寺式と考えられた吉備池廃寺の伽藍配置は、大きく修正を迫られることとなり、杉崎廃寺（７世紀末創建；岐阜県古川町）のように、中門や講堂は金堂の南北軸線上に建つのではないかと推定されるようになってきました。このため本年度は中門および講堂、北面回廊の検出を目的として、金堂の南側と北側に調査区を設定しました。ここでは便宜的にこれらを「南区」、「北区」と呼んでおきます。調査は１月９日から開始し、現在も継続中です。調査面積は、南区が約 530 ㎡、北区が約 600 ㎡です。



法隆寺西院の伽藍配置図



杉崎廃寺の伽藍配置図



調査位置図および伽藍復原図（1:1000）

2．発掘調査の成果

(1)南区

第３次調査区の東方で、金堂の南側にあたります。検出したおもな遺構は、中門、南面回廊、東西溝、掘立柱塀などです。遺構のほとんどは、巨大な流路（古墳時代？）に由来すると思われる砂礫層で検出しました。

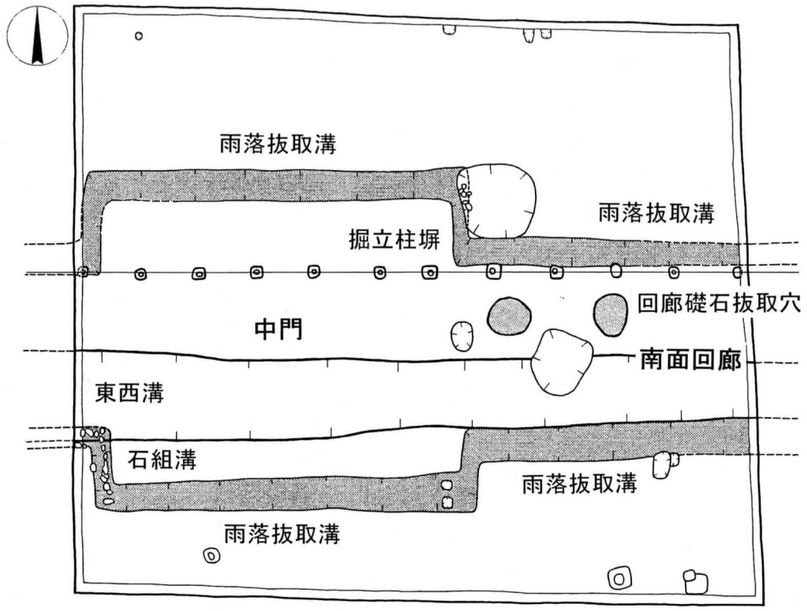
中門　調査区の南西隅付近で、南北方向の石組溝を発見しました。この石組溝は２ｍほどで途切れますが、南端でこれにつながるように東西方向の溝があり、さらにこの溝を東に追いかけると、北に折れたあとクランク状に東にのびて、方形に張り出します。この北側にもほぼ対称形に溝で区画された張り出しがあります。これこそ中門の遺構であり、第３次調査の成果などから、南北方向の石組溝は中門基壇南西の雨落溝、そのほかの溝は中門基壇の雨落溝を抜き取った痕跡と考えられます。しかし、この雨落溝の抜き取り痕跡で囲まれたなかには、中門の礎石据付穴や抜取穴などの痕跡は、発見することができませんでした。おそらく後世に削平されたものと思われます。

以上から、中門の基壇規模は東西 12.0 ｍ×南北 9.8 ｍほどと推定され、正面３間×側面２間で正面中央の柱間に扉が開く中門を復原できます。柱間寸法は不明ですが、一案として桁行中央間 3.6 ｍ、桁行両脇間 2.7 ｍ、梁行 3.4 ｍ、軒の出 1.8 ｍに復原することができます。

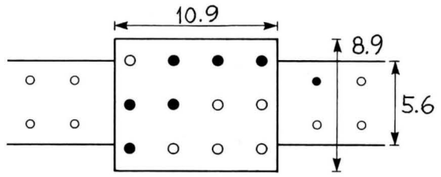
南面回廊　調査区の南西隅付近で東西方向の石組溝を発見しました。これは第３次調査で検出した南面回廊の南雨落溝の東延長線上にあたります。中門の東にも、回廊の雨落溝を抜き取った溝が続きます。また中門の東では、直径 1.2 ～ 1.5 ｍほど穴が東西に２つならびます。これは回廊北側柱筋の礎石を抜いた穴と考えられ、穴どうしの間隔は３ｍほどになります。回廊の基壇幅は明確ではありませんが、第３次調査で判明している 5.6 ｍとみてよいと思われます。

東西溝　調査区中央部やや南よりを東西に横断する素掘溝があります。この溝は回廊南雨落溝に接し、幅２～３ｍ、深さ 50 ㎝以上となります。同様の溝は第３次調査でも検出しており、それに続くものでしょう。出土遺物から藤原京の時代の遺構と考えられます

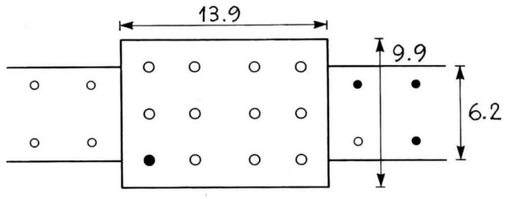
掘立柱塀　調査区中央部（東西溝の北側）を東西に横断する掘立柱穴列があります。掘形は約 50 ㎝の方形で、抜取穴には黄色い粘土が入ることが特徴です。第３次調査区でも同様の位置にこの柱列を検出しており、回廊建設時における足場と考えましたが、本調査区では中門上を直線的に横断することから、藤原京の時代（７世紀末～８世紀初）の塀である可能性が高まりました。



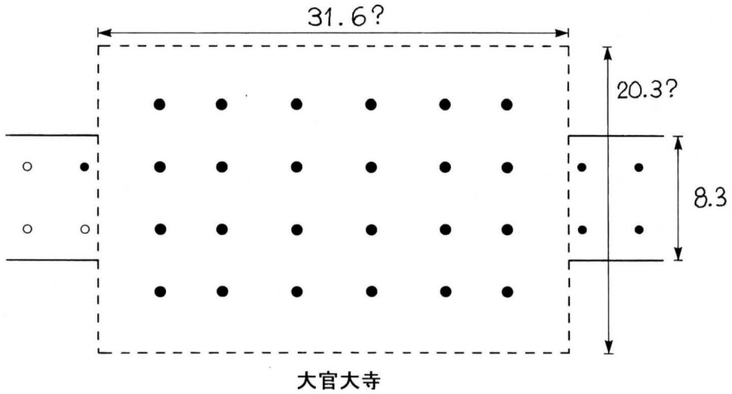
南区調査遺構図（1:200）



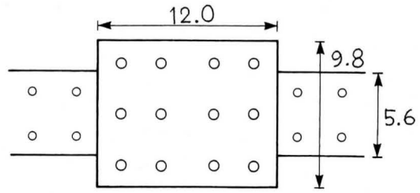
橘寺



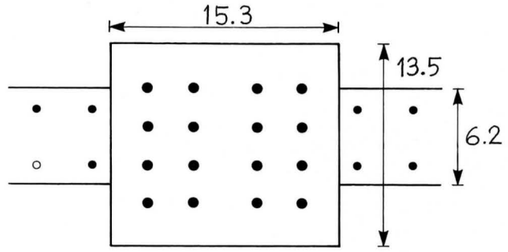
川原寺



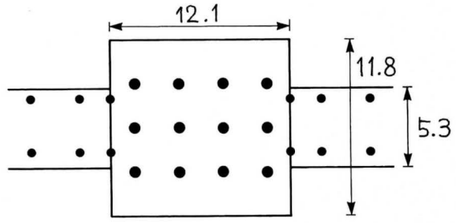
大官大寺



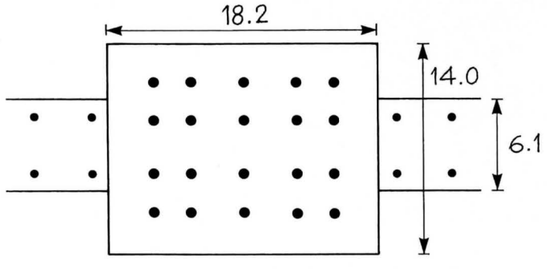
吉備池廃寺



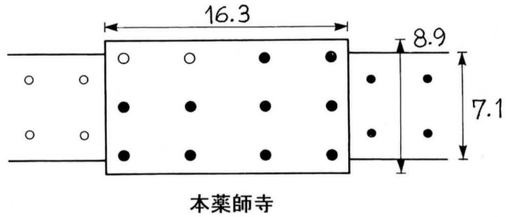
飛鳥寺



四天王寺



法隆寺



本薬師寺

７世紀の寺院における中門・回廊の比較
（単位：ｍ）

(2) 北区

第４次調査区の東方で、桜井市による調査区（1998 年度）の南方に位置し、金堂の北方にあたります。検出したおもな遺構は、大型掘立柱建物１棟とそれにともなう溝のほか、掘立柱建物数棟、東西溝などです。遺構の大部分は花崗岩が風化した地山面で検出しました。当初、５ｍ× 40 ｍの南北に細長い調査区を設定しましたが、その北端部で大型掘立柱建物を発見したため、調査区を東西に大きく拡張しました。

大型掘立柱建物　調査区北方にある桁行 11 間×梁行２間の掘立柱建物。東妻は調査区の東壁際にあり、西妻は調査区の西端付近で検出しました。2.0 × 1.5 ｍほどの巨大な柱掘形をもち、柱のほとんどは抜き取られています。全体の長さは東西 28.0 ｍ×南北 5.4 ｍほどで、柱間寸法は桁行方向が約 2.5 ｍ、梁行方向が約 2.7 ｍとなります。また、柱痕跡が残る柱穴から、柱径は 25 ～ 30 ㎝ほどと考えられます。

この東西に長い建物の外側（北側柱の北および南側柱の南）には、東西溝があります。この東西溝は、建物の西端近くで直角に折れて南北溝となり、調査区の北方に延びてゆきます。建物の外側を囲うように巡ることから、この建物の雨落溝と考えてよいでしょう。建物の推定柱位置からの距離は約 1.2 ｍとなり、これがこの建物の軒の出と考えられます。

その他の遺構　大型掘立柱建物と重なる位置には、藤原京の時代と考えられる桁行４間×梁行１間の掘立柱建物があります。このほか、調査区北東部にも、２間×２間の掘立柱建物があり、さらに南に張り出した調査区の中ほどには、幅 1.0 ｍ、深さ 50 ㎝の素掘りの東西溝があります。この東西溝からは、８世紀中頃の土器が出土しました。

百済大寺・高市大寺の略沿革

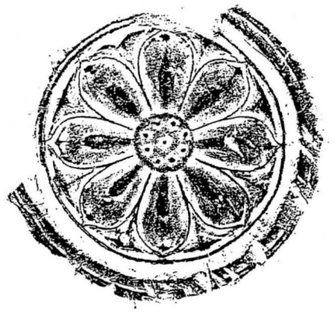
６３９（舒明11年）	大宮と**大寺**をつくる。百済川のほとりを宮地とし、西の民は宮を造り、東の民は寺を作る。書直県をその**大匠**とする。 **百済川**のほとりに**九重塔**を建てる。	日本書紀
	百済川のほとりに子部社を切りひらいて、**九重塔**を建てる。**百済大寺**と号す。	大安寺伽藍縁起并流記資財帳（以下、縁起）
６４２（皇極元年）	**百済大寺**を建てるために、近江と越の人夫を動員。	日本書紀
６７３（天武２年）	美濃王と紀臣訶多麻呂を**造高市大寺司**に任命する。	日本書紀
	百済の地から**高市の地**に寺を移す。	縁　起
６７７（天武６年）	**高市大寺**（たけちのおおでら）を改めて、**大官大寺**（だいかんだいじ）と号す。	縁　起
６９４（持統８年）	持統、藤原宮（ふじわらのみや）へ移る。	日本書紀
７０２（大宝２年）	高橋朝臣笠間を**造大安寺司**に任命する。	続日本紀
この頃（文 武 朝）	文武、**九重塔**と**金堂**を建て、**丈六の仏像**をつくる。	縁　起
７１０（和銅３年）	元明、平城宮（ならのみや）へ移る。	続日本紀
７１６（霊亀２年）	（**大安寺**を）平城京へ移し建てる。	続日本紀

３．出土遺物

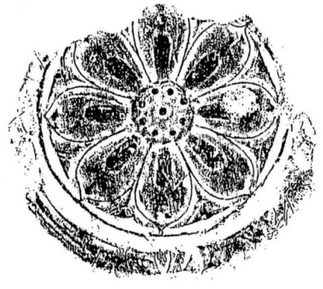
土器はおもに北区から７世紀半ば～中世のものが少量ずつ出土しています。７世紀半ばのものは百済大寺創建のものとみてよく、水瓶風の細頸壺など、寺院関連とみられる土器が目立ちます。

瓦は北区から多く出土しています。瓦の全体量は現在のところ 260 ㎏におよび、完形に近い瓦が数点出土するなど、これまでの調査ではみられなかった様相をもっています。大型掘立柱建物付近からの出土が目立ちますが、この建物は瓦葺きと考えられませんから、周囲に瓦葺き建物があったことを推測させます。

そのほかに坩堝（るつぼ）や硯（すずり）が出土しています。

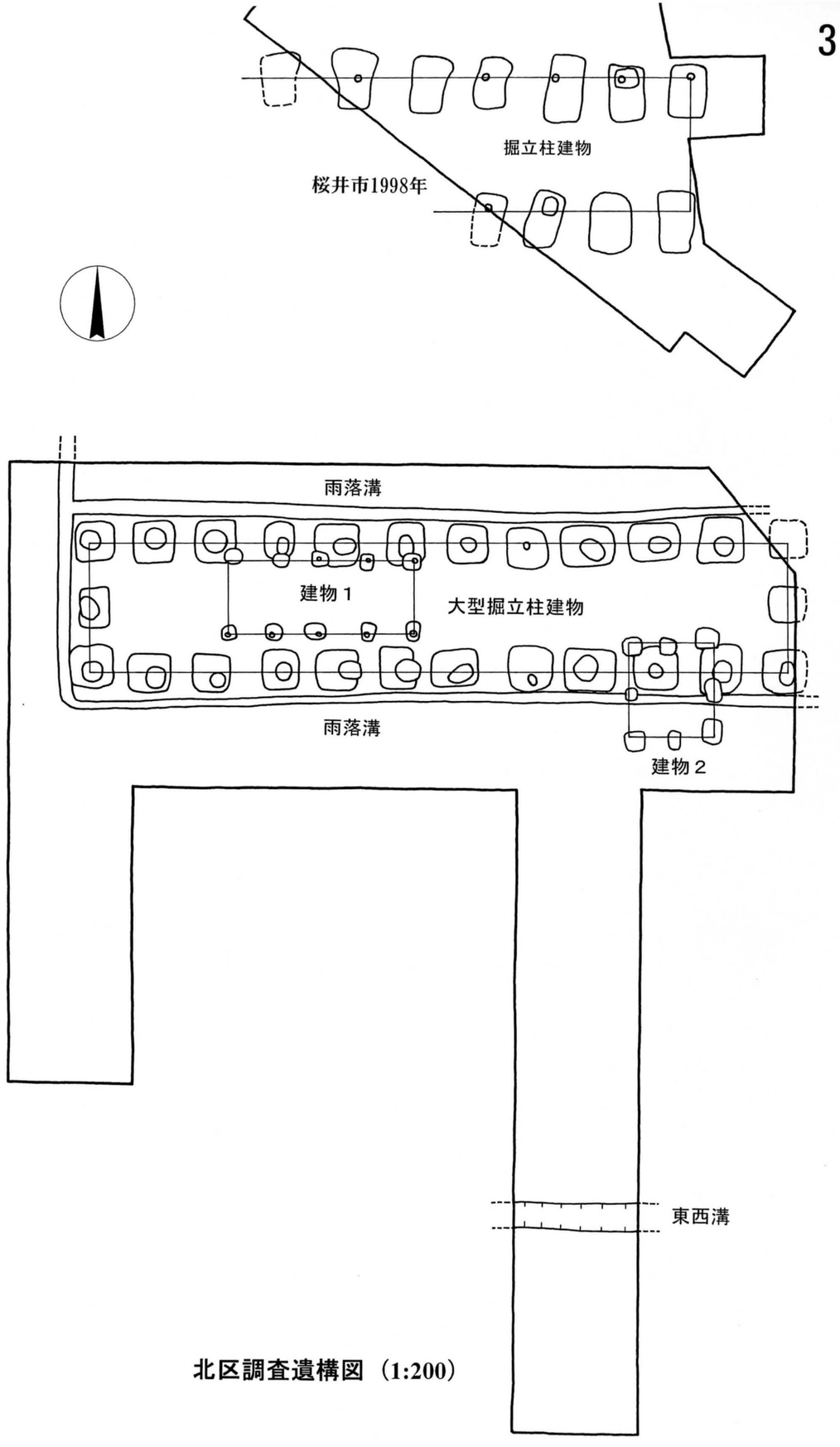


ＩＡ
（本調査区出土）



ＩＢ
（木之本廃寺出土）

吉備池廃寺の軒瓦



北区調査遺構図（1:200）

4．成果と課題

(1) 中門を発見

昨年度までの調査によって、金堂や塔は同時代の他の寺院とは隔絶した規模をもつことが判明しています。ところが、今回の調査で発見した中門は、東西 12.0 m×南北 9.8 mほどと推定される基壇の規模から考えて、桁行３間×梁行２間という予想外に小規模なものでした。つまり、金堂や塔が巨大なのに対して、中門はやや見劣りするわけです。さらに７世紀の中門は、現存する法隆寺中門（４間×３間）をはじめ、飛鳥寺中門（３間×３間）、大官大寺中門（５間×３間）など、梁行を３間にとるものが知られています。それらと比較しても小規模なのです。

いっぽう回廊については、基壇幅が約 5.6 mと推定できることから、梁行は約 3.0 mほどと考えられます。これも他の寺院の回廊と比べて小規模です。

しかし、中門と回廊の組み合わせだけをみれば、非常にバランスのとれた規模だということがわかります。どうして中門と回廊が小さいのか？　金堂や塔とのアンバランスさは否めないところですが、これは今後に残された解明すべき課題のひとつです。

(2) 大型掘立柱建物の性格

はじめに述べたように、北区で発見した大型掘立柱建物とよく似た建物は、桜井市による 1998 年度の調査でもみつかっています。桜井市の調査で発見された建物は、桁行６間以上×梁行１間で、柱間寸法は桁行が 2.72 m、梁行が 5.45 mです。今回発見した建物とは側柱間で約 13.5 m、建物心心間で約 18.9 m離れています。この２棟の建物は、柱穴位置や柱間寸法に若干の違いがあるものの、巨大な柱穴をもつことや出土遺物の年代観から、同時期に建っていたと考えてよいと思います。

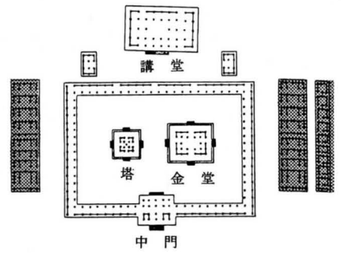
このような細長い建物は、桜井市の調査所見のように、僧侶が日常生活をおくる僧房とみて間違いないでしょう。現存する最古の僧房は、法隆寺西院伽藍の東にある東室（ひがしむろ）という建物で（747 年以前に建立）、発掘調査で確認されている最古の僧房遺構は、川原寺（665 年ころ創建）の西僧房です。今回発見した僧房遺構は、百済大寺（639 年創建、673 年移建）の僧房と考えられますから、これまで発見されているなかでは、**最古の僧房遺構**となります。

８世紀の大きな寺院の場合、僧房は講堂を取り囲むように東・西・北の３方に配して、三面僧房を構成します。また梁行の大きい僧房（大房）と梁行の小さい僧房（小房＝小子房）を並立させて、一体として使うのがふつうです。ただし、このような特徴はいつまで遡るかわかっていません。桜井市の調査と今回の調査で発見した２棟の僧房は、南北に２棟並立しており、密接な関係をもつものと考えられますが、梁行規模はほとんど同じでありながら、桁行方向の柱間寸法に若干の相違点がみられるなど、８世紀の僧房の特徴と異なる点があります。今回判明した２棟の僧房の特徴が、７世紀半頃まで遡る一般的なものなのか、百済大寺独自のものなのか、類例に乏しく判断できませんが、僧房の建物形式やその発展過程を究明するうえで、貴重な発見といえるでしょう。

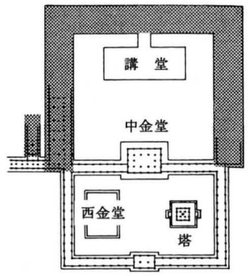
ところで金堂の南北中軸線は北区の発掘区西端付近を通ります。ですから、今回発見した僧房は金堂中軸線からふり分けられている、つまり東西に並立している可能性があります。このように多数の僧房が想定でき、ここで生活した僧侶の数の多さをしのばせます。このほか中門・回廊が造られていることからみても、吉備池廃寺の完成度は高く、名実ともに寺院として機能していたと考えてよいでしょう。

文献にみえる僧房

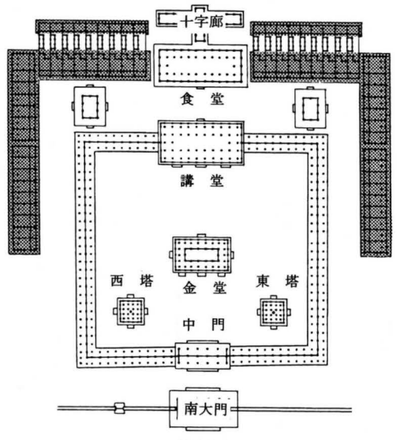
	大房				中房				小房				出典
		長	広	高		長	広	高		長	広	高	
興福寺	2口	11間	45尺	16.6尺					2口	11間	15尺	12尺	興福寺流記
	1口	19間	45尺	16.6尺					1口	19間	15尺	12尺	
大安寺	2口	274.5尺	39尺	10.5尺	2口	274.5尺			1口	100尺	12尺	9尺	大安寺伽藍縁起并流記資財帳
	2口	245尺	39尺	10.5尺	2口	291尺	30尺	11尺	1口	291尺			
	2口	125尺	39尺	10.5尺	1口	270尺							
元興寺	2口	12房	43尺						2口	12房			
	2口	10房	43尺						2口	10房			
									1口	18間			
東大寺			52尺				35尺				13尺		『奈良時代僧房の研究』
法隆寺		175尺	38尺	11尺									法隆寺伽藍縁起并流記資財帳
		181尺	38尺	不明									
		155尺	32尺	不明									
		106尺	38尺	不明									



法隆寺



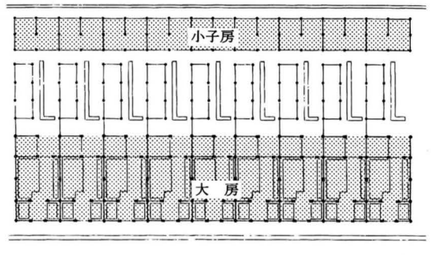
川原寺



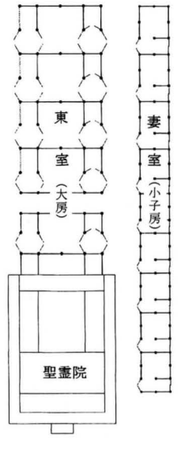
薬師寺

僧房の類例（1:800）と伽藍配置上の位置（1:3000）

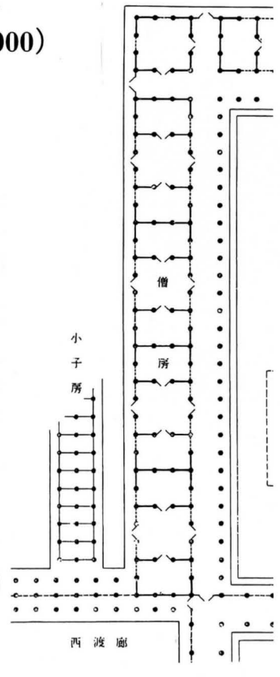
（アミかけ部分が僧房）



薬師寺西僧房



法隆寺東室・妻室



川原寺西僧房

(3) 吉備池廃寺の伽藍配置

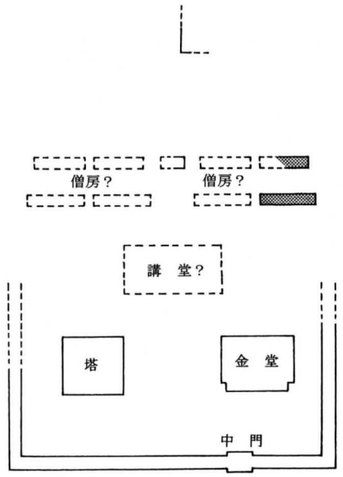
今回の調査によって、中門は金堂の中心を通る南北の軸線（中軸線）上になく、西へずれていることが明らかになりました。金堂中軸線から中門中軸線までの東西間距離は約 9.9 mです。また、東面回廊の南北推定心から中門中軸線までの距離は約 44.1 mになります。金堂と中門の西辺を合わせているわけでもなく、塔との関係からその位置が決まったわけでもなさそうです。したがって、現在のところ、どうして**中門は金堂の中軸線上にない**のか、その位置をどのようにして決定したのかはナゾとしておかなければなりません。

一方、北区で今回発見した僧房とはある規則性があるようです。すなわち、金堂と塔の建物心々間距離は約 85 mですが、これは金堂心から僧房の北側柱までの距離とほぼ等しいのです。また先ほども述べたように、僧房は金堂中軸線をはさんで東西に並立している可能性があります。ただし、先ほどの金堂と塔の距離（85 m）は、飛鳥時代の測地基準である高麗尺（＝大尺；1大尺≒0356 m）に換算しても、キリのいい数値にはなりません。これらの点を含めて、吉備池廃寺の伽藍配置計画の解明が今後の課題として浮上してきました。

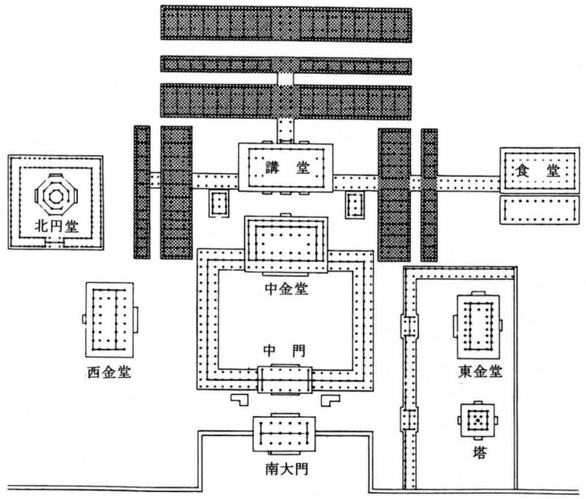
もうひとつ、伽藍配置のなかで重要な問題があります。北区で発見されると予想していた**講堂がみつからなかった**ことです。金堂と塔の中心部北方を発掘した第４次調査でも、講堂は発見されていません。そもそも講堂は建てられていたのでしょうか。文献によれば 651 年につくられた繍仏は、百済大寺の後身である奈良時代の大安寺に伝存しています。薬師寺では、繍仏は講堂に安置されています。伽藍の完成度も高いわけですから、講堂も存在したはずですが、これまでの調査ではその位置を特定できませんでした。８世紀の大寺院の伽藍配置をみると、僧房は講堂の近くに配置されています。今回の調査区では瓦が多量に出土することから、瓦葺きの建物がこの付近にあったことが想像され、講堂（もしくは食堂）が近くに建っていた可能性もあると考えています。なお、講堂の所在に関連して、**北面回廊の所在**も今回の調査ではわかりませんでした。

伽藍全体の広がりという点からみると、今回の調査によって少なくとも金堂北側には、複数棟の僧房の存在が確認でき、これらを伽藍中軸線から西に折り返せば、塔の北方にも僧房が建ち並ぶ姿を想定できるかもしれません。また、2000 年度におこなった桜井市の調査では、伽藍北方にある丘陵から、吉備池廃寺と関連をもつ遺構を検出しています。これらによって、吉備池廃寺はかなり広大な寺域を有していたと考えられるのです。

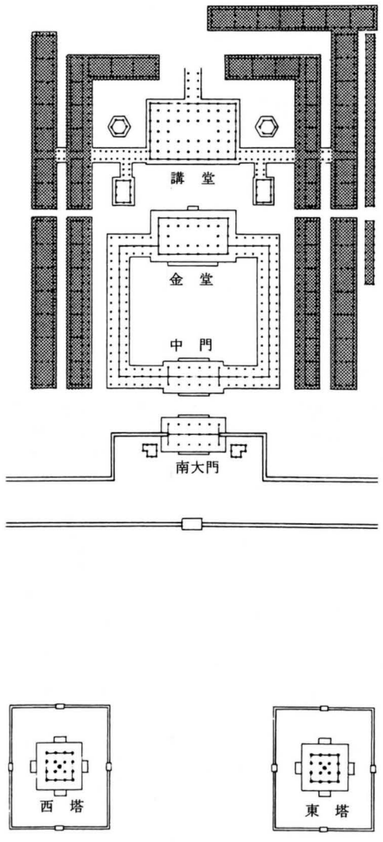
今回の調査では、講堂や北面回廊はみつかりませんでしたが、中門と僧房を発見したことは大きな成果です。それによって、吉備池廃寺の伽藍配置の一端が明らかになっただけでなく、７世紀の寺院史および建築史に新たな資料を提供したと言えるでしょう。特に僧房が多数建ち並んでいたことが推定できるようになったことは、巨大な金堂、塔と合わせて、日本最初の天皇による勅願寺としての威容が、ますます浮かび上がってきたと言えます。



吉備池廃寺伽藍復原図



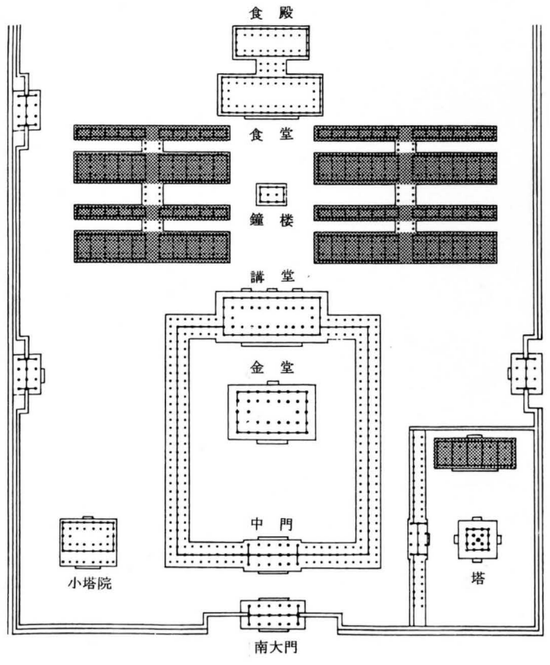
興福寺



大安寺

８世紀における
大寺院の伽藍配置と僧房

（1:3000　アミかけ部分が僧房）



元興寺